

「紅葉山 33 号遺跡出土の漆塗り弓（文様入り）」

にかかわる資料調査（令和5～7年度）

Report on the Investigation of Cultural Property
(from April 2023 to March 2026)
;the lacquered bow (with patterns) excavated
from Momijiyama archaeological site No. 33 in Ishikari City

荒山 千恵^{*1} 大江 克己^{*2}・藪中 剛司^{*2}・石橋 孝夫^{*3}

Chie ARAYAMA^{*1}, Katsuki OE^{*2}, Takeshi YABUNAKA^{*2}, Takao ISHIBASHI^{*3}

要 旨

石狩市紅葉山 33 号遺跡出土の漆塗り弓（文様入り）を対象として，製作技術や装飾部の特徴を把握することを目的に，道内外の資料調査，類似する可能性のある文様をもつ資料との比較検討，X 線 CT 装置や高精細画像を用いた分析調査を実施した．弓の表面に線描された文様の詳細，樋とみられる溝の痕跡や糸巻きとみられる痕跡の位置や範囲を確認し，当該資料の製作工程や文様帯の特徴を把握する基礎データを得ることができた．

キーワード：紅葉山 33 号遺跡，漆塗り弓，渦巻文，続縄文文化，市指定文化財

1 はじめに

本稿は，石狩市の市指定文化財第 10 号に指定された「紅葉山 33 号遺跡出土の漆塗り弓（文様入り）」（2025 年（令和 7 年）6 月 30 日指定）に伴い，令和 5～7 年度に実施した調査について報告する（写真 1，写真 2，写真 4，図 1）．

2 対象資料の概要

石狩市花川南地区に所在する紅葉山 33 号遺跡から出土した漆塗り弓は，1982 年に石狩町教育委員会が実施した発掘調査によって出土したものである（石狩町教育委員会，1984）．この遺跡から出土した漆塗り弓は本例 1 点のみである．墓壇



写真 1．紅葉山 33 号遺跡 (GP-46) 漆塗り弓 出土状況 (全体撮影，1982 年)．

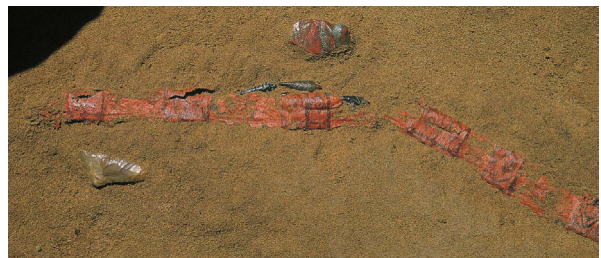


写真 2．紅葉山 33 号遺跡 (GP-46) 漆塗り弓と石器の出土状況 (部分撮影，1982 年)．
文様帯にみられる渦巻文や糸巻き状の痕跡，樋とみられる溝の痕跡が観察される．

*1 いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町 30-4

*2 国立アイヌ民族博物館 〒059-0902 北海道白老郡白老町若草町 2 丁目 3-1

*3 いしかり砂丘の風資料館（学芸協力員）〒061-3372 北海道石狩市弁天町 30-4

(GP-46)の底部付近から、完形の土器1点(写真3)や多数の石器類と共に出土し、遺構や遺物の状態からこれらを副葬品として安置したものと推測されている。墓壙(GP-46)では、計219点の出土品が確認されている。漆塗り弓の時期は続縄文文化前半期(以下、続縄文前半期)に相当し、年代は約2000年前である^(注1)。弓の現存部の全長は105cm、土圧により潰れた状態で幅3cmほどである。弓本来の太さ(直径)の復元値は2cm前後(外周約6cm÷円周率3.14)である。木質部分は朽ちて消失しているが、弓全体に塗布された朱色の漆の塗膜が潰れた状態で残りほぼ全体の形が窺える。残された塗膜には11箇所黒色・茶色で描かれたトゲ状突起の付いた渦巻文を基調とする文様帯が認められ、文様は扁平に潰れた塗膜の両面にわたり確認できる(図2)。このような特徴の構図をもつ漆塗り弓は極めて珍しく、同様の漆塗り弓を全国各地の出土例から探しているが、類例は今のところ確認できていない。

当該資料が出土した1982年の調査記録や出土状況の所見については、発掘調査報告書(石狩町教育委員会, 1984; 1985)による詳細な記録、発掘調査を担当した石橋孝夫による紹介(石橋, 1984; 1999; 2005; 2013)などがある。また、近年では、漆塗り弓の発見から遺物の取り上げ、2005年に保存処理が完了するまでの経緯を中心にまとめた紀要がある(荒山・石橋, 2023; 荒山, 2023)。

紅葉山33号遺跡の漆塗り弓がポリエステル樹脂封入により公開可能になったのは2005年であるが、発見当時から、続縄文前半期の漆塗り弓に施された渦巻文がアイヌ文様に類似することで注目された(佐々木, 1983; 石橋, 1984; 1999; 小林ほか, 2003ほか)。また、展示「新 弥生紀行-北の森から南の海へ」(国立歴史民俗博物館編, 1999)(以下、「新 弥生紀行」)では、当該資料の復元品が展示され、実物の公開前から道内外で広く知られるところとなった。「新 弥生紀

行」に展示された復元品については、後述に触れるように、現在は国立歴史民俗博物館に展示されている(写真18)。近年では、実物を公開した展示として、いしかり砂丘の風資料館テーマ展「発掘された石狩の遺跡」(2022)、国立アイヌ民族博物館第7回特別展示「考古学と歴史学からみるアイヌ史展」(2023)、いしかり砂丘の風資料館開館20周年記念特別展「石狩十大事件-何が現在の石狩をつくった?」(2024)、新市指定文化財特別展「紅葉山33号遺跡出土の漆塗り弓(文様入り)」(2025)がある。



写真3. 紅葉山33号遺跡(GP-46)土器。

3 調査の目的と実施方法

本調査では、国立アイヌ民族博物館とのX線CT調査から得られたデータの分析のほか、北海道内や本州を含めた漆塗り弓の出土資料の確認、近年の新たな調査資料の実見をおこなった。また、弓以外の資料で類似する文様が存在し、あるいは弓の文様と関係がある可能性も考えて調査することとした。具体的には次の3点である。

第一に、北海道内の遺跡から出土した漆塗り弓の全容を把握し、近隣地域の弓と比較するための資料調査を実施した。また、道外の遺跡から出土した木質部分の残存する例や装飾性が確認されている例から、弓全体の特徴や製作技術・装飾部の特徴を把握するための資料調査を実施した。道外調査で対象とした遺跡は、石川県金沢市中屋サワ遺跡、富山県氷見市上津久呂中屋遺跡である。資料調査については、主に荒山が担当した。

第二に、紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓の文様を検討するため、弓以外の渦巻文の類例について検討した。具体的には、縄文文化前半期の出土品にみられる渦巻文、道東部の縄文文化晩期の土器にみられる文様、縄文文化晩期から弥生文化初頭みられる本州の渦巻文・双頭渦文、土器以外にみられる弥生文化の渦巻文・双頭渦文についてである。特に、文様の構図やトゲ状突起の有無、道具の機能・用途を焦点として比較した。

第三に、分析装置を用いた X 線 CT 調査（形状計測・断層面観察）・高精細画像の撮影により、目視による表面観察では難しい製作技術や内部構造の検討、文様帯の詳細を把握するための基礎データを得るための調査をおこなった。分析調査は、国立アイヌ民族博物館の分析機器を用いた令和 6 年度プンカラ共同研究プロジェクトによる実施である（荒山ほか 2025）。分析装置は大江が担当し、撮影画像の検討は共同メンバー（荒山、大江、藪中、石橋）との協議により実施した。

4 資料調査の内容と結果

4-1 に道内で実施した資料調査、4-2 に道外で実施した資料調査について報告する。

4-1 北海道内の遺跡から出土した漆塗り弓との比較

北海道内で出土した縄文文化後期～縄文文化前半期の漆塗り弓（飾り弓）として確認されている資料は、15 遺跡 34 点である（表 1）。時期別では、縄文文化後期の 28 点（黒色 13 点、赤色 15 点）、縄文文化晩期の 2 点（赤色 2 点）、縄文文化の 4 点（赤色 4 点）である。遺存状態が良好で弓全体の形状のわかる状態の資料は少なく、その多くは木質部分が失われ、表面の塗膜部分が残存したものである^{（注 2）}。道外では低湿地から弓の木質部分を留めた状態で出土した飾り弓が数多く確認されているが、道内では木質部分を留めて出土した漆塗り弓は数少ない。出土状況では墓墳から発見されたものが目立つ。



図 1. 紅葉山 33 号遺跡 漆塗り弓
（石狩町教育委員，1984 付図に彩色）。

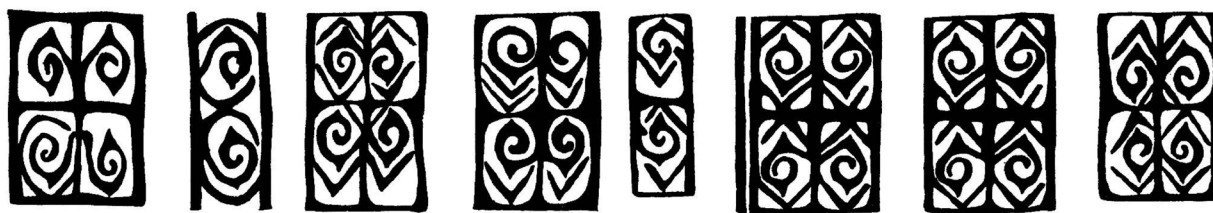


図 2. 漆塗り弓に描かれた各文様の展開模試図（石橋，1999 改変）。

表1. 北海道内出土の漆塗り弓一覧(小林1981をもとに一部追加・改変のうえ作成)。

帰属 時期	市町村	遺跡	遺構	色	数	現存長 (cm)	全長 (cm)	樹種/ 顔料	文献	線描によ る文様 (本調査に よる確認)	筋状の状態 (本調査に よる確認)	資料 調査
縄 文 後 期	小樽市	忍路土場		黒	1	破片		広葉樹・ 環孔材	北海道埋蔵文化財セン ター 1989	○		
	三石町	ホロケ台地	第3号墳	赤	1	破片			藤本 1960	○		
	深川市	音江	第11号墳	赤	1	90	100	朱	駒井 1959	○		
	静内町	御殿山	第10号墳	赤	1		短弓?		藤本 1961	○		
	千歳市	美々4呑口		黒	7	40~82	—	ヤナギ	北海道教育委員会 1979	○		
	苫小牧市	美沢1	JX-3, P106	赤	1	138			北海道教育委員会 1979	○		
				赤	1	102			北海道教育委員会 1979	○		
			JX-3, P112	黒	1	126			北海道教育委員会 1979	○		
				黒	1	102			北海道教育委員会 1979	○		
			JX-3, P113	赤	1	108			北海道教育委員会 1979	○		
			JX-3, P115	黒	1	96			北海道教育委員会 1979	○	なし	あり ◎
			JX-3, P119	赤	1	60			北海道教育委員会 1979	○		
			JX-3, P120	黒	1	102			北海道教育委員会 1979	○		
	千歳市	美々4	BS-3, P-9	黒	1	140			北海道埋蔵文化財セ ンター 1981	○		
			BS-3, P-14	赤	1	160		朱, ベンガラ	北海道埋蔵文化財セ ンター 1981	○		
	恵庭市	柏木B	第1103号 土壌墓	赤	1	100	100		恵庭市教育委員会 1981	○		
			第3001号 土壌墓	赤	1	100	100	朱, ベンガラ	恵庭市教育委員会 1981	○	なし	あり ◎
	千歳市	丸子山	1号環状土籬 内墓墳	赤	1	170	170	朱, ベンガラ	千歳市教育委員会 1994	○	なし	あり ○
			2号環状土籬 内4号墓墳	赤	1	170	170	朱, ベンガラ	千歳市教育委員会 1994	○		
	千歳市	キウス4	盛土遺構	赤	1	約100			北海道埋蔵文化財セ ンター 1998	○	なし	あり ◎
			水場遺構 周辺	赤 (No.10)	1	長(8.9) 幅2.93 厚2.22		ニシシギ 属(丸木)	北海道埋蔵文化財セ ンター 1999	—	なし	糸巻あり ◎
			水場遺構 周辺	赤 (No.11)	1	長(7.01) 幅2.02 厚2.49		ニシシギ 属(丸木)	北海道埋蔵文化財セ ンター 1999	—	なし	なし ◎
縄 文 晩 期	石狩市	志美4	第24号墓	赤	1	150	150		石狩市教育委員会 1979	○		
				赤	1	150	150		石狩市教育委員会 1979	○		
続 縄 文	石狩市	紅葉山 33号	土壌墓 (GP-46)	赤 文様(線描)	1	105		ベンガラ	石狩市教育委員会 1984	○	あり	あり ◎
	白老町	アヨロ	第115号墓	赤	1	破片			高橋 1980	○		
	苫小牧市	タブコブ	GP14	赤	1	105	112	ベンガラ	苫小牧市教育委員会 1984	○	(なし)	△
	苫小牧市	ニナルカ	GP3	赤	1	85	110	ベンガラ	苫小牧市教育委員会 1985	○	(なし)	△
合計		15遺跡			34	点		本表は小林(1998)の一覧をもとに、一部追加・改変のうえまとめた。				
内訳	縄文後期	10遺跡		黒 赤	13点 15点	28	点	【凡例】「資料調査」欄 ○…実物資料により確認 ○…写真により確認 △…聞き取り等				
	縄文晩期	1遺跡		赤	2点	2	点					
	続縄文	4遺跡		赤	4点	4	点					

資料調査で実見した漆塗り弓は、千歳市キウス 4 遺跡（北海道埋蔵文化財センター，1998；1999；2003）の 3 点，恵庭市柏木 B 遺跡（恵庭市教育委員会 1981）の 1 点，苫小牧市美沢 1 遺跡（北海道教育委員会 1979）の 1 点である。い

れも報告書の所見を参照のうえ目視により観察した。千歳市丸子山遺跡（千歳市教育委員会 1994）の 1 点は，報告書の所見および分析結果を参照のうえ，出土状況の写真から確認した。観察内容および観察時の画像を一覧と図版にまとめて示す（表 2，写真 4～9）。

表 2. 漆塗り弓（写真 5～9）の調査内容。

対象資料	観 察 内 容	掲載 番号
1 千歳市キウス 4 遺跡 「朱塗りの弓」 縄文文化後期 (図 V - 6 - 7, 北埋調報 124, 1998)	盛土遺構の下層から出土したものである。全体が朱色に塗布され，塗膜のみの状態で長さ約 1 m ほど残存する（北海道埋蔵文化財センター 1998）。塗膜全体が幅 1 mm 程度の筋状に割れた状態が目視で観察される。報告書に，「糸巻き痕が残る」との所見がある（北海道埋蔵文化財センター 2003：59）。塗膜上に線描による文様は確認されなかった。	写真 5
2 千歳市キウス 4 遺跡 「朱漆塗丸木弓片」 縄文文化後期 (No.10, 北埋調報 134, 1999)	水場遺構周辺から出土した丸木弓片 2 点のうちの 1 点。破片の現存長は約 9 cm，両端部を欠損した状態である。残存部は少ないものの弓本体の木質部分と外面の塗膜および糸巻部分が良好な状態で残存した道内では数少ない出土例である。報告書によると，木取りは丸木を用いたもので，残存部の最大径は 2.3cm，樹種はニシギ属である。弓には撚り糸が巻かれ，報告書の所見に，「これらの撚り糸はベンガラ漆で固定した後，さらに朱漆を塗り重ねている」とある（北海道埋蔵文化財センター編 1999：231）。弓の残存部の中間に帯状のくぼみが 1 周し，そこを境界の特徴が異なっている。上方部では黒色が縞模様のように現れている。線描による文様は目視では確認されなかった。	写真 6
3 千歳市キウス 4 遺跡 「朱漆塗丸木弓片」 縄文文化後期 (No.11, 北埋調報 134, 1999)	水場遺構周辺から出土した丸木弓片 2 点のうちの 1 点である。両端部を欠損し現存長は約 7 cm である。残存部は少ないが，弓本体の木質部分と外面の塗膜が残存している。報告書によると，木取りは丸木を用いたもので，残存部の最大径は 2.1cm，樹種はニシギ属である。外面に朱色が塗布され，その下地に塗られた黒色は各所に見えるが，糸巻きの痕跡はみられない。また，線描による文様も確認されなかった。報告書の所見に，「10・11 は表面の加工や飾りの有無が異なるが，同一個体とも考えられる」とある（北海道埋蔵文化財センター編 1999：231）。	—
4 苫小牧市美沢 1 遺跡 「JX-3 黒色漆塗り弓」 縄文文化後期 (北海道教育委員会 1979)	黒色の塗膜全体が残された状態で，外面全体に 7mm 前後の帯状に割れた状態が観察される。撮影した塗膜部分の画像を拡大すると，帯状に割れた表面にはさらに極細の筋が入っている。キウス 4 遺跡 No.10 のように，巻き糸で局部的に凹凸をつけて装飾的に仕上げるような痕跡は確認されなかった。線描による文様も確認されなかった。	写真 7
5 恵庭市柏木 B 遺跡 「漆塗り弓」 縄文文化後期 (恵庭市教育委員会 1981)	柏木 B 遺跡では，異なる土壌墓から 2 点の漆塗り弓が確認され，そのうち土中から取り上げられたのは第 3 号環状土籬（周堤墓）の墓墳（第 3001 号土墳墓）から出土した 1 点である（恵庭市教育委員会 1981）。木質部分は朽ちているが外面の塗膜部分が残存し，全体は朱色，全長は報告書の計測値で約 1 m，幅約 4 cm である。片側先端部が 2 つに分岐した痕跡がみられ，通常の弓の形状とは異なっている。そこに撚り糸を丁寧に巻きつけ，その上に朱色を塗布したとみられる。先端部以外では幅 5 mm 前後の幅で筋が入り帯状に割れている箇所がみられ，さらに撚り糸状のものを巻いた装飾的な凹凸が外面に現れている。線描による文様は確認されなかった。本資料については，顕微鏡分析による所見がある（小林 1998）。	写真 8
6 千歳市丸子山遺跡 「赤漆塗り弓」 縄文文化後期 (千歳市教育委員会 1994)	丸子山遺跡では，異なる土壌墓から 2 点の漆塗り弓が確認され，そのうち土中から取り上げられたのは第 1 号環状土籬（周堤墓）の土壌墓から出土した 1 点で，長さ 170cm である（千歳市教育委員会 1994）。本資料は報告書に掲載される出土状況の写真を借用して確認した。出土した弓は朱色で，その外面が筋状に割れているのが観察される。写真は弓の一部分であるが，そこには線描による文様は見られない。本資料については，顕微鏡分析の所見が報告されている（小林 1994：249，小林 1998）。	写真 9



写真4. 石狩市紅葉山33号遺跡 漆塗り弓の出土状況(文様部)。(石狩町教育委員会, 1984).



写真5. 千歳市キウス4遺跡「朱塗りの弓」(部分撮影). 北海道立埋蔵文化財センター所蔵, 資料調査による撮影.



写真6. 千歳市キウス4遺跡「朱漆塗丸木弓片」.
北海道立埋蔵文化財センター所蔵, 資料調査による撮影.



写真7. 苫小牧市美沢1遺跡(JX-3出土)「黒色漆塗弓」
(部分撮影). 資料提供: 苫小牧市美術博物館, 資料調査による撮影.



写真8. 恵庭市柏木B遺跡「漆塗弓」
(部分撮影・中央部付近). 恵庭市郷土資料館所蔵,
資料調査による撮影.



写真9. 千歳市丸子山遺跡「赤漆塗り弓」出土状況
(部分撮影). 千歳市教育委員会提供.

写真 5・7・8・9 は、目視により残存している塗膜部分に弓の長軸方向に直交する方向に筋状に割れた状態が見られたものである。これらは、木質部分も残存していたキウス 4 遺跡 No.10(写真 6) の出土品に観察されるように、糸状ないしは紐状（もしくはテープ状）のもので弓本体を巻いていたことによる痕跡が塗膜に残されたものと推測される。これらの出土品の中には顕微鏡観察によって糸巻きとみられる痕跡が報告されている例もある（恵庭市柏木 B 遺跡、千歳市美々 4 遺跡、千歳市丸子山遺跡）（小林，1981；千歳市教育委員会，1994）。紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓では、保存処理後の状態として、文様の施される部位（以下、文様帯）で長軸方向に直交する方向に、細く筋状に割れた状態が観察される。発見当時の所見には、「1 mm 未満の糸巻き」とあり、出土状況の写真から文様帯での糸巻きが推測される（写真 4）（石狩町教育委員会，1984）。これらの筋状に割れた塗膜の状態は、木質部分の失われた漆塗り弓の製作技術や装飾技法を検討するうえで重要な痕跡といえる。紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓に伴う糸巻きの検討については、後述する機器分析による結果のなかで改めて取り上げる。観察した資料のうち、糸状や紐状の巻きつけにより装飾的に仕上げた可能性のあるものは確認されたが、紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓のような線描により文様を施した例は確認されなかった。

4-2 北海道外の遺跡から出土した飾り弓との比較（1）- 木質部分の残存する例から -

道外の遺跡から出土した飾り弓の資料調査を実施した^{（注 3）}。対象としたのは、日本海沿岸側に位置する石川県金沢市中屋サワ遺跡の出土品についてである（金沢市，2009；2010）。中屋サワ遺跡では、飾り弓（漆による装飾の認められるもの）28 点（35%）、白木弓 52 点（65%）、合計 80 点の出土が報告されている（金沢市，2010：157-160）。時期は縄文文化晩期である。本調査では、道内の

漆塗り弓では把握することが難しい、弓の全体形状や木質部分を含めた製作技術・装飾技法、樋（弓の長軸方向に沿って木質本体に入れられる 1 本の溝状の切り込み）、糸巻きの特徴などを把握することを目的とした。今回の調査では、各資料の大きさ、所見、統計的な傾向について報告書を参照のうえ、遺存状態の良好な資料、欠損部を伴うが残存部に製作技術や装飾性が観察される資料を中心に、大半の出土品を実見した。ここでは、特に、紅葉山 33 号遺跡の検討において参考になった点について取り上げる。

第一に、弓の形状、木取り、樹種についてである。中屋サワ遺跡出土の弓の形状は、湾曲度の違いや直線的な形状のものなどが見られ、折損により全体形状の不明なものも多いが、概して、弓全体が緩やかな弧を描く形状である。紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓の出土時の形状にみられるような、弓の中央部に逆反りを呈する形状をもつ明瞭な例はみられなかった。木取りは、丸木を用いた丸木弓がほとんどで、樹種はイヌガヤ 43 点、コナラ属 クヌギ節 1 点、ニシシギ属 1 点クワ属 1 点である（金沢市，2009；金沢市，2010）。

第二に、弓本体に観察される樋についてである。中屋サワ遺跡の弓では、幅 0.3～0.5cm 前後の細くて浅い溝が弓の長軸方向に 1 本入るものが複数例に見られ、主に弓がやや湾曲して膨らみをもつ面に入れられている（図 3-1、写真 10）。報告書によると、弓本体（弓幹）に樋をもつものは全体で 36%（29 点）、そのうち白木弓で樋をもつ比率は 24%（11 点）であるのに対し、飾り弓では 57%（17 点）で、「樋を切る主目的は材の強度の均衡を図るためであるが、飾り弓に対する比率の高さから装飾的な側面も考えられる」（金沢市，2010:157）としている。紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓にも残存する塗膜部分に一筋の溝の痕跡が長軸方向に確認され（石狩市教育委員会，1984）、弓本体に丸木を用いて、そこに樋を入れていた可能性がある。中屋サワ遺跡の弓から、木質部分に

残された樋の断面形状や溝の幅や深さを実見できたことで、復元的な検討をおこなうための知見を得ることができた。後述するCT調査により樋とみられる溝の幅や横断面の形状を検討するうえでも参考になった。

第三に、弓の装飾についてである。中屋サワ遺跡では、弓本体に局部的に細糸や撚り紐を巻いたものがみられる(例：図3-1, 3-2, 写真10・11)。糸巻きもしくは糸巻痕の確認されるもの10点、糸巻きと縄(撚り紐)の確認されるもの15点があり、このほかに樹皮巻き1点が確認されている。報告書では、「糸や紐と漆などによる装飾の帯を装飾帯と呼称し、「5～10mm前後の幅で細い糸を巻き付けた上に撚り紐を巻いたA類、20～30mm前後の幅で同手法の太いものをB類とするが、B類については紐の巻き方がそれぞれ

異なる」と分類する(金沢市, 2010:101)。弓の本体に局部的に装飾帯を複数箇所配置し、特にB類では撚り紐により幾何学的な文様が現れるように繊細な装飾が施されている(図3-1)。漆を塗布した彩色については、外面に黒漆を施した例が22点ほど確認されている。また、黒色系の漆と赤漆の塗布の認められる弓が1個体分(4点)で確認されおり、「装飾帯は撚り紐を巻きつけたもので、帯とその周囲に赤色漆を塗布し、「撚り紐帯と赤色帯で構成する装飾帯と考えられ、そのほかは黒色系漆が塗布されていたようだが、剥落部が多く、全容は不明」とある^(注4)(金沢市2010:102)。中屋サワ遺跡から出土した飾り弓28点のうち、紅葉山33号遺跡の漆塗り弓のように文様を線描により施す例は確認されなかった。

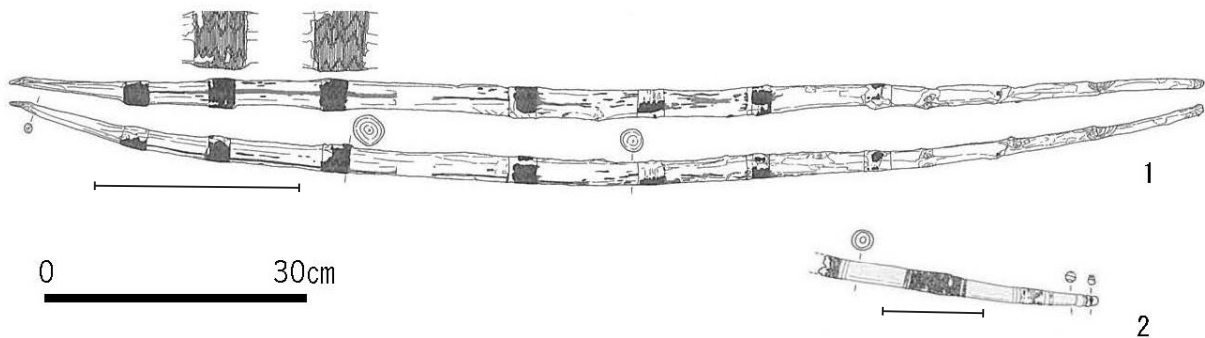


図3. 金沢市中屋サワ遺跡 飾り弓(金沢市埋蔵文化財センター所蔵)

1: No.1531(金沢市, 2010), 2: No.1031(金沢市, 2009).

(1・2は、報告書に掲載されている図の向きを写真10・11に合わせ回転し、1に写真10の撮影部分、2に写真11の拡大鏡部分を追記掲載)。



写真10. 金沢市中屋サワ遺跡 飾り弓 No.1531
写真は巻きつけ・樋の状態の部分撮影。
(金沢市埋蔵文化財センター所蔵、資料調査による撮影) ※写真10・11は縮尺不同。

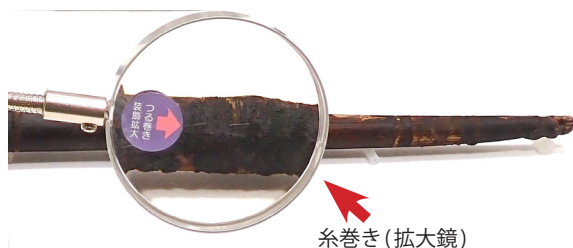


写真11. 金沢市中屋サワ遺跡 漆塗り弓 No.1031
写真は巻きつけの状態の部分撮影。
(金沢市埋蔵文化財センター所蔵、金沢市埋蔵文化財センター常設展示の資料調査による撮影)。

4-3 北海道外の遺跡から出土した「飾り弓」との比較（2） - 線描により文様を施す例から -

遺跡から出土した飾り弓のうち、線描により文様を施した例は、ほとんど知られていない。本調査で確認できたのは、富山県氷見市上久津呂中屋遺跡から出土した飾り弓 (No.1898) 1 点である (図 4) (富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所, 2013)。全体に漆を塗り、両端部に赤色漆による文様を施している。当初は弧状漆塗木製品とされていた資料である (石川, 2005)。石川 (2005) によると、復元長で約 52cm (図 4 の縦方向)・約 28cm (図 4 の横方向) である。帰属時期は縄文文化中期後葉 (放射性炭素年代測定の結果は $4,340 \pm 30$ yrBP (NUTA2-10452)) である (富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所, 2013:247-248)。報告書の所見によると、コナラ属のコルク組織を芯材に 0.6～1mm 間隔で斜めの刻みを入れ、その上に樹皮を 1～5mm ずつ重複させながら巻き付けている。その後で全面に漆を 2～3 層塗り重ね、その上に両端部にベンガラを混ぜた赤色漆で文様を描く (図 4 の「先端部展開図・先端部拡大図」参照)。文様は両端部で異なり、一端には 3～4 条 1 単位の直線を帯状に巡らせ蕨手状・半弧状の曲線文を描き (図 4 の端部 B)，もう一端には数条の帯状直線文とこれを繋ぐような直線文を施している (図 4 の端部 A)。

本資料を目視観察により実見のうえ、紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓と比較した。双方の資料は、年代では 2000 年以上の開きがある。共通点としては、弓の表面に文様を線描していることである。ただし、弓の大きさや形状・構造が大きく異なることから、両者は別種の弓と考えられる。文様部を比較すると、上久津呂中屋遺跡例は細身の先端部 (太さ 1cm 以下) に文様を施すのに対し、紅葉山 33 号遺跡例の弓の直径復元値は 2cm 前後とみられ、弓を外周するように展開させて施す文様帯の大きさに違いがある。文様の構図では、上久津呂中屋遺跡例は数条の直線文に蕨手状の文様を

組み合わせたものであるのに対し、紅葉山 33 号遺跡例は区画線の中にトゲ状突起のついた渦巻文 (主に双頭渦文) を描いている。弓の表面に直線と曲線を線描する手法を用いて文様を施している点では双方で共通しているが、基調とする文様構成は異なっている。

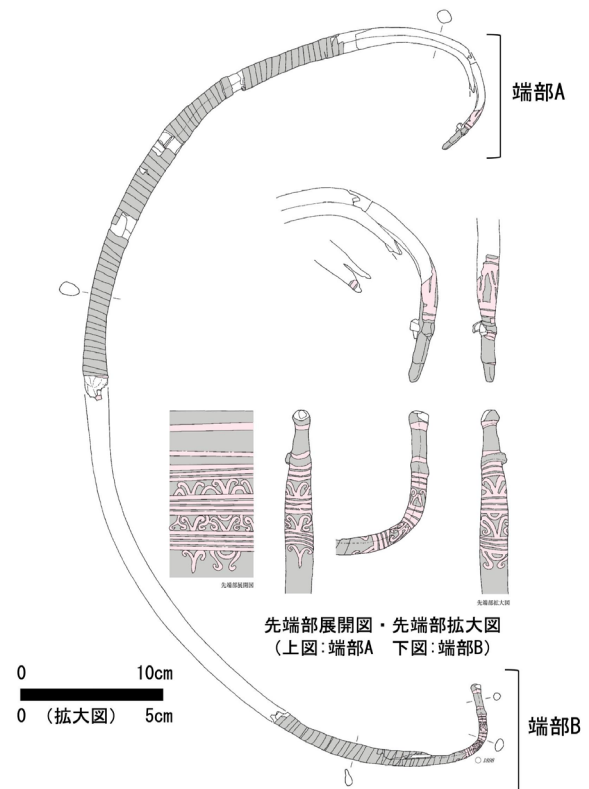


図 4. 氷見市上久津呂中屋遺跡 飾り弓 No.1898.
(富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所, 2013: 第 197 図, 一部加筆改編)。

5 渦巻文の比較

紅葉山 33 号遺跡出土の漆塗り弓には、弓全体の 11 箇所にも渦巻文を基調とする文様が描かれているが、この遺跡から出土した土器の文様には渦巻文を施す例は確認されていない。本調査では、紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓の文様に類似する可能性のある資料について検討するため、弓以外にみられる渦巻文・双頭渦文・渦巻状の文様をもつ資料について確認した。

5-1 続縄文前半期の出土品にみられる渦巻文 (1) 伊達市有珠モシリ遺跡出土の骨角器と渦巻文

伊達市有珠モシリ遺跡から出土した骨角器のうち、銚頭の2点に左右に渦巻文を施すものがある(図5-1, 5-2)(伊達市教育委員会, 2003; 伊達市噴火湾文化研究所, 2026). 特に, 図5-1は、渦巻文と山形状ないしは綾杉状の文様を組み合わせた構図で、紅葉山33号遺跡の文様帯のうち6箇所にも渦巻文と山形状の文様を組み合わせた構

図がみられる(一部推定を含む)(図6)^(注5). 有珠モシリ遺跡の骨角器の文様について、青野友哉は北陸地方の縄文文化晩期の土器型式の文様変化を参照し、続縄文前半期の骨角器の文様要素に型式学的な検討を加えている(青野, 2025). 図示(図7)された文様の変化のうち、①③④に類似する要素が紅葉山33号遺跡の漆塗り弓の文様帯の構図の中にも認められる. ただし、紅葉山33号遺跡の渦巻文にみられる、巻き込み部分にトゲ状の突起を付した文様は見られない.

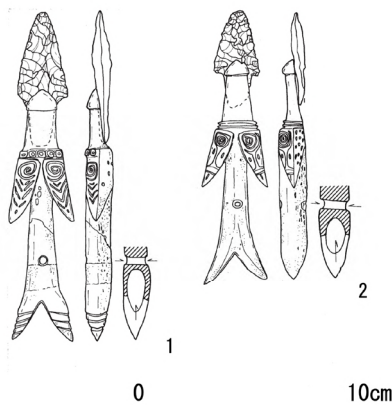


図5. 伊達市有珠モシリ遺跡 渦巻文をもつ銚頭.
(伊達市噴火湾文化研究所, 2026).

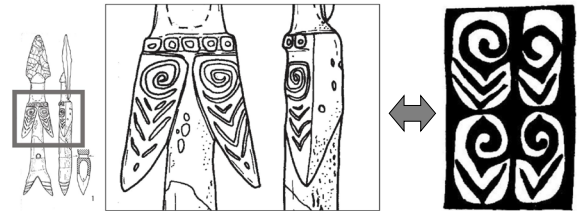
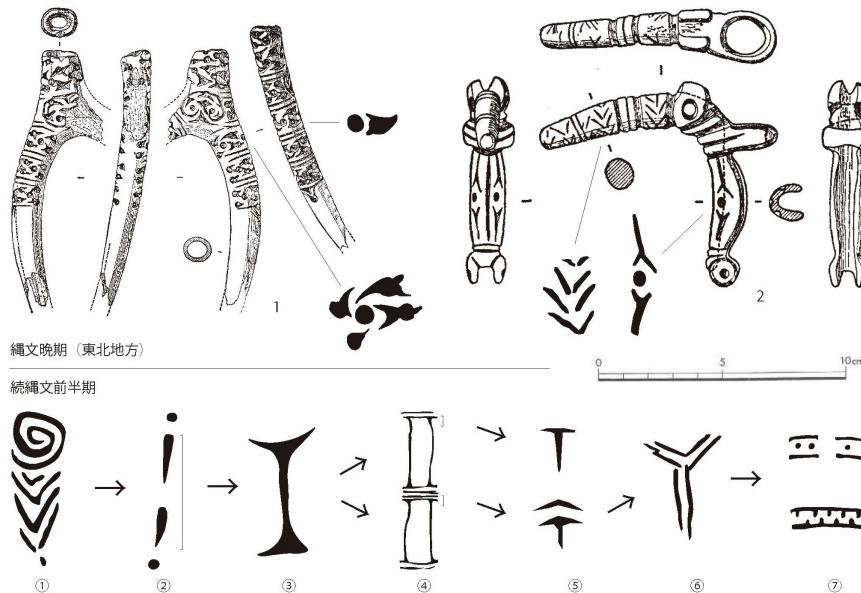


図6. 有珠モシリ遺跡銚頭の渦巻文(左・図5の1を部分拡大)と紅葉山33号遺跡漆塗り弓の渦巻文(右・模式図)との比較.



骨角器の文様の変化

1: 岩手県陸前高田市中沢浜貝塚(縄文晩期前葉)、2: 山形県東根市蟹沢遺跡(縄文晩期中葉)(春成 1985 から転載し、文様部分をトレース)

①~⑦: 北海道出土の骨角器(続縄文前半期)の文様をトレース

図7. 骨角器の文様の変化(青野, 2025).

（2）恵山式土器の中にみられる渦巻文（渦文，双頭渦文）

恵山式土器の中に，渦巻文（渦文）を施す例が指摘されている．設楽博己は，北海道南部の北斗市（旧上磯町）茂別遺跡出土の恵山 1b 式土器の磨消縄文のモチーフについて，「福島県いわき地方に主体的に分布する龍門寺式土器の磨消縄文によく類似した文様モチーフや南御山 2 式の渦文に近似したモチーフも認められ，西桔梗 B2 遺跡の土器のあり方と共通」し，「恵山 1b 式と龍門寺式は並行関係」とみられること（設楽，2003：21，23），西桔梗 B2 遺跡の双頭渦文をもつ壺形土器，茂別遺跡の双頭渦文の鉢形土器などが該当することを指摘している（設楽，2003：31）．また，「恵山式系土器の中部日本への南下とは逆に絵画や渦文土器，龍門寺式土器の文様モチーフが北上」し，「弥生Ⅱ期後半からⅢ期にかけての文化の活発な動きに触発されたものであろう」と述べている（設楽，2003：34）．図示されている土器の「渦文」では，紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓に見られるトゲ状の突起や区画の中に描く渦巻文の構図は見られないようである．

5-2 道東部の縄文文化晩期の土器にみられる文様-北海道北見市常呂川河口遺跡から出土した副葬品-

北見市常呂川河口遺跡出土の幣舞式土器（縄文文化晩期）の文様について実見した^{（注6）}．これらの土器のなかに渦巻状の文様を施す例がある（図 8）．双頭渦文に類似する構図が複数の土器にみられ，4 つの渦巻状の文様を配置する例も認められる．これらの土器のなかに，上下の渦巻状の文様を繋ぐように短い直線状の線が入るもの（図 8-1）や，渦巻状の周りに 2 本または 3 本の刻線状の文様を入れたもの（図 8-2）がみられるものがある．ただし，紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓のトゲ状突起のように一つの渦巻文の上下 2 箇所が付された規則性のあるものは確認されなかった．

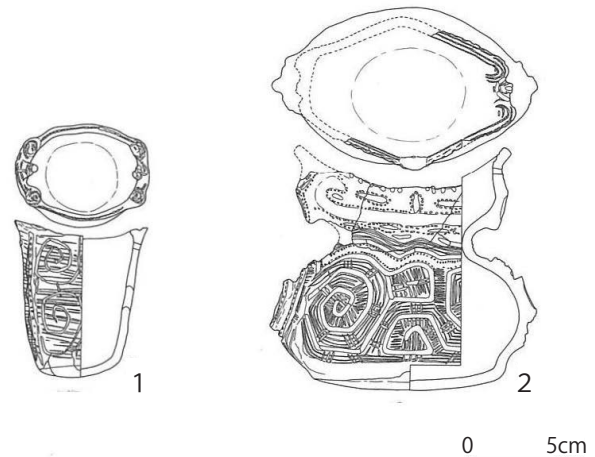


図 8．幣舞式土器 北見市常呂川河口遺跡．渦巻状の文様を施す例（常呂町教育委員会，1996）

5-3 縄文文化晩期から弥生文化初頭にみられる本州の渦巻文・双頭渦文

縄文文化晩期から弥生文化初頭に渦巻文（渦文）を施す本州以南の土器についてである．中村（1988）は，畿内第Ⅰ様式と東日本の土器との編年関係の検討の中で，奈良県唐古遺跡の朱彩紋土器，東京都田原遺跡の沈線紋土器に双頭渦文の確認される例があり，時期は畿内第Ⅰ様式中段階に比定されることを述べている（中村 1988：250－251）．また，茨城県日立市大沼遺跡の土器の底部に二組の双頭渦文を沈線で描いた例（大洞 A' 式直後），青森県薬師Ⅱ遺跡の注口土器底部に双頭渦文を描いた例（大洞 A 式もしくは大洞 A' 式）があることを指摘している（同上）．「弧状のモチーフの紋様を持つ土器」では，弧状の両端が渦文になっている場合があるが，これは「朱彩紋と異なり弧紋の幅が狭い沈線や隆帯の場合に，両端が強く巻き込み，このような紋様となりやすいのでなかろうか」と述べ，先述の双頭渦文とは区別した見解を示している（中村 1988：200）．図版で示される「渦文」を確認する限りでは，これらの巻き込みにトゲ状突起は付されていない．

縄文文化晩期の東北地方には渦巻文ないしは渦巻状に近い文様を施すさまざまな出土品が確認される．文様を比較するための参考資料として，青

森県八戸市是川中居遺跡の注口土器にみられる渦卷文(八戸市教育委員会編, 2011: 25, 通番号61), 青森県つがる市亀ヶ岡遺跡の土偶の文様に



写真12. 注口土器 八戸市是川中居遺跡。
底面に双頭渦文(写真下)。
(八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館所蔵)
※左右の写真は縮尺不同。

ついて写真により確認したところ, 巻き込みにトゲ状突起は付されていない。(写真12, 13)。



写真13. 遮光器土偶。
つがる市木造亀ヶ岡遺跡。
東京国立博物館 J-38392
出典: ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)。

5-4 土器以外にみられる弥生文化の渦卷文・双頭渦文

弥生文化における土器以外の出土品にみられる渦卷文を施す例について, ここでは二つ取り上げる。

一つは, 木製盾に施された渦卷文である。鳥取県青谷上寺地遺跡では複数の木製盾が出土しており, そのうちの1点に上方部左右に2つ並んだ反転する渦卷文を施し, 下方に鋸歯状の文様を施したものが確認される(図9)。時期は弥生文化中期後葉である(鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター, 2002)。楯に施された渦卷文にトゲ状突起は付されていないが, 矢を射るための「弓」, 矢を防御するための「盾」に, 双頭渦文と山形状の文様を組み合わせた構図が確認されることは, その用途や性格において注目される。

もう一つは, 銅鐸に施された渦卷文である。兵庫県神戸市東灘区住吉町渦森出土の袈裟襷文銅鐸(弥生文化中期)には, 鐸身・鈕・耳飾りに渦文が確認され, 鐸身・鈕・鐸身の下方には三角形の連

続する鋸歯文が施されている(写真14)。耳飾りの双頭渦文は, 弥生文化後期の突線鈕式銅鐸になると顕著に大きくなる(写真15)。これらの銅鐸に施される渦卷文は, 紅葉山33号遺跡の漆塗り弓にみられる緩やかな渦卷文と比較すると, 螺旋の回転数が多く緻密である。

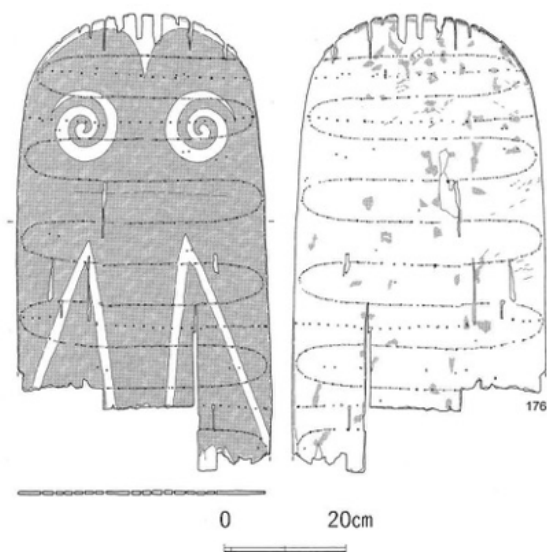


図9. 鳥取県青谷上寺地遺跡 盾(弥生中期中葉)。
(鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター, 2002; 第270図176(36632))。



写真 14. 兵庫県神戸市東灘区住吉町渦森出土
袈裟襷文銅鐸 東京国立博物館所蔵。
(弥生文化中期 J-23713).
出典：東京国立博物館 画像検索 (<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/index>).



写真 15. 滋賀県野洲市小篠原字大岩山出土
突線鈕式銅鐸 東京国立博物館所蔵。
(弥生文化後期 J-826).
出典：ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>).

5-5 アイヌ民族の「モレウ」文との比較

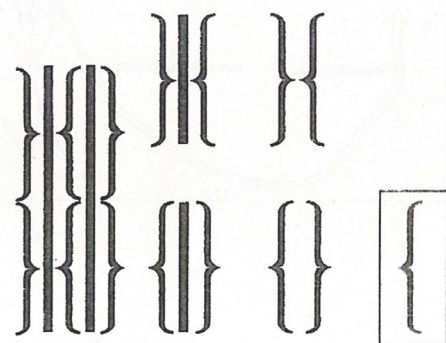
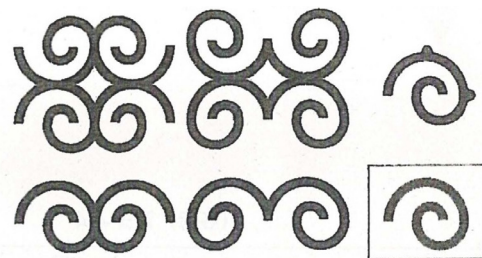
紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓に描かれたトゲ状突起の付された渦巻文の特徴は、当初からアイヌ文様の「モレウ」、特に「アイウシ・モレウ」と酷似していることが注目されてきた（佐々木，1983 ほか）。北海道新聞社（1981）『北海道大百科事典（上巻）』の「アイヌ文様」によると、次のように記される。

「アイヌの人たちが日常使う生活用具や祭具などほとんどのものに施される図形。（中略）アイウシ、アイウシ（かっこ文、とげがあるという意味）モレウ（渦巻文、小さく曲がるという意味）が基本で、それぞれいくつかの変形がある。（後略）」（児玉，1981：29）。

また、吉川弘文館（2022）『アイヌ文化史辞典』の「渦巻文様」には、次のように記される。

「モレウ。（中略）アイヌ刺繍やアップリケに施される主要な文様のパターンに「モレウ」という渦巻文様と「アイウシ」（とげのある文様）がある。モレウはカムイシキ（神の目）と呼ばれることもあり、雷神（カンナカムイ）の表現だとする証言もある。「アイウシ」は植物のとげを模したものとされる。（中略）これは身にまとう者を災いや病魔などから守るという願いが込められていると紹介されることがある。（中略）ただし、アイヌ自身によるこうした模様の意味に関する説は少

なく、多くの場合は確証がないまま推測が独り歩きし、神秘や呪術を付加し、万人受けを狙った言説に過ぎないとする研究もある。文様の形はアイヌの居住地を超えて広く共通するものがみられ、サハリンやアムール川下流域地方にも分布し、西はモンゴル、東は千島列島にもみられ、古くから文化交流が存在したことを示唆している。」（図 10）（手塚，2022:343-344）。



渦巻文様（上がモレウ、下がアイウシ）

図 10. 渦巻文様 モレウとアイウシ。
(吉川弘文館 2022『アイヌ文化史辞典』344 頁「渦巻文様」転載、原図：国立民族学博物館編 1993『アイヌモシリ 民族文様からみたアイヌの世界』)。

本調査で実施した、紅葉山33号遺跡の漆塗り弓の属する時期に前後する縄文文化晩期、続縄文文化、弥生文化に属する出土品に施された各種の渦巻文を確認した結果では、規則的なトゲ状突起を付す類例を確認することはできなかった。当初から注目されてきたアイヌ文様の「アイウシ・モレウ」との類似性については、両者の帰属時期に隔たりはあるが、トゲ状突起を付した緩やかな双頭渦文を基本的な構図とする点は、ほかの渦巻文にはみられない共通性がある。突起を付した文様の例としては、三葉文、唐草文様などがあり、図像の中で渦状に湾曲したり突起を付す表現はみられる。ただ、出現時期の違い、基本的な構図としての違い、双頭渦文ではない点が異なっている。

6 機器分析調査からの検討

紅葉山33号遺跡の漆塗り弓を対象とした機器分析調査を実施した。木質部分は失われ塗膜部分のみが残された出土品から、漆塗り弓の製作技術や装飾技法の痕跡、文様の詳細を把握するため、樹脂包埋のままX線CT装置を用いた形状計測・断層面撮影、高精細画像の撮影^(注7)を試みたものである(荒山ほか, 2025; 荒山, 2025; 大江, 2025)。分析により得られた基礎データについて

は別稿に報告予定である。ここでは、前章までに記した資料調査を踏まえ、機器分析調査の結果に基づき検討した点について記す。

6-1 高精細画像による資料の両面記録と線描による文様の観察

樹脂包埋された状態の漆塗り弓の両面を高精細画像により撮影した(写真16・17)。弓全体と両面に残されている線描された文様の詳細を画像から確認することが可能となった。各所の文様を観察すると、線描の切り合い関係から、「①区画となるラインを入れる→②区画に合わせて渦巻文を描く→③渦巻文の巻き込みの上下にトゲ状突起を付す」順番により描かれた可能性が考えられる。弓の11箇所描かれた渦巻文は、いずれも少しずつ形状が異なり、先に線描した区画に合わせて描き入れたことが考えられる。また、巻き込みに付したトゲ状突起の多くは、単に点を付したような描き方ではなく、三角形に先端を尖らせているのが確認される。さらに、渦巻文・山形文・トゲ状突起を描いた線の太さは一定ではなく、線描の動きに連動するように太さや濃淡に変化が認められることから、柔軟性のある工具を用いて一筆書きのような手法により描いた可能性が考えられる。



写真16. 紅葉山33号遺跡出土の漆塗り弓(文様入り).
上：出土したときの表面(図1の向きに合わせて掲載) 下：出土したときの裏面.
▼1・2・3は写真17の文様部の位置および向き.
(所蔵資料：石狩市教育委員会 画像：国立アイヌ民族博物館 2024年撮影).



写真 17. 紅葉山 33 号遺跡出土の漆塗り弓の文様部。
(所蔵資料：石狩市教育委員会 画像：国立アイヌ民族博物館 2024 年撮影)。

6-2 樋とみられる溝の痕跡

紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓は、発見された際、この漆製品を弓と推定した根拠の一つは、樋とみられる溝の痕跡が塗膜上で目視により確認されたからである（図 1，写真 2）（石狩市教育委員会，1984）。CT 調査では、長軸方向の断層画像で樋とみられる溝の痕跡の位置や範囲を把握すること

ができた（図 11）（荒山・大江ほか，2025；大江 2025）。加えて、中央部付近では短軸方向の断層画像により V 状の溝の窪み（幅 4mm 前後・深さ約 1.5mm）を捉えることができた。今後、樋を入れた漆塗り弓の構造的な検討を進めていくうえで有用なデータになると考える。

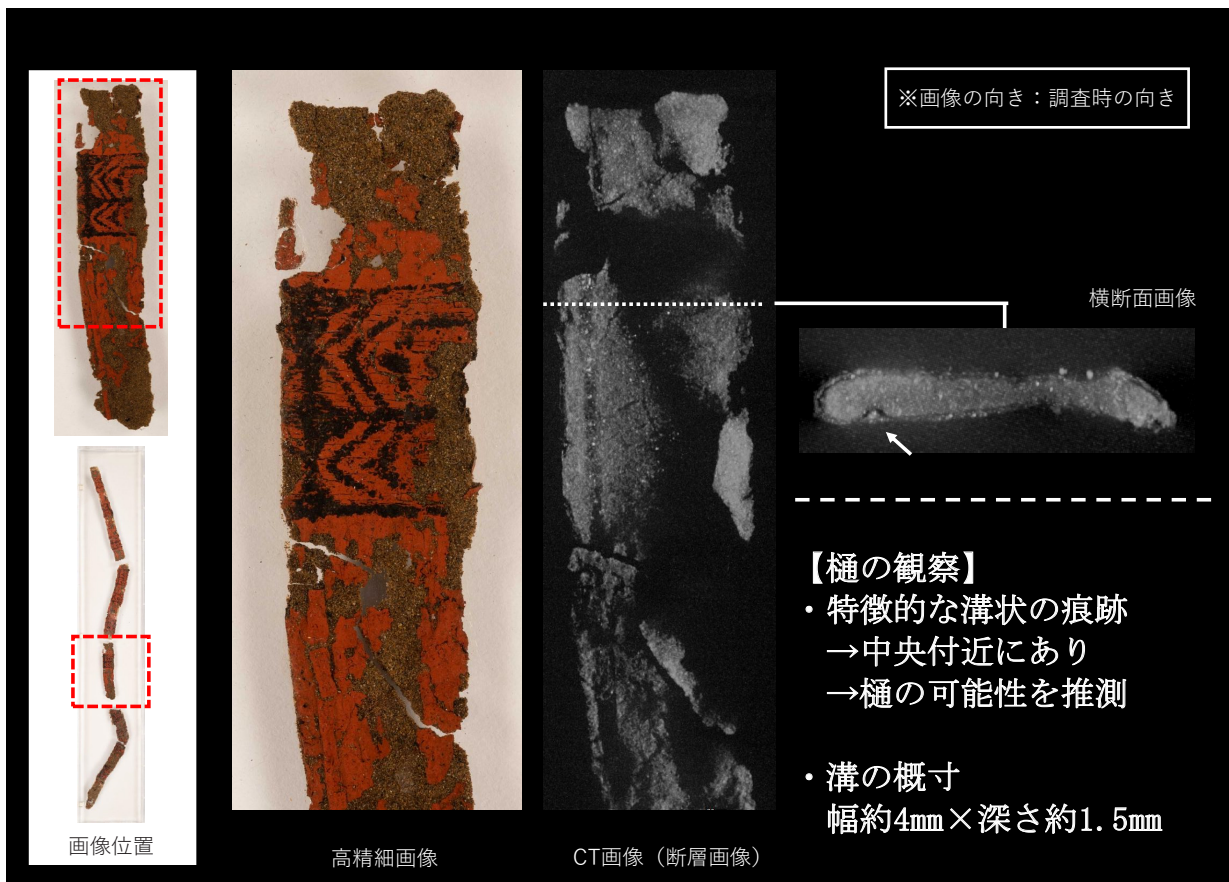


図 11. 弓の構造（樋の確認）（大江，2025，一部改変）。

6-3 装飾部にみられる筋状の痕跡

紅葉山33号遺跡の漆塗り弓が出土した当時の所見・写真によると、残された漆の皮膜は外面が朱色、内面は黒色で、弓には11箇所にとり幅3～5cmで細い糸(直径1mm以下)が巻きつけられ、その部分にさらに漆を塗布したとみられ、その上に文様が描かれていることが推測されている(石狩町教育委員会, 1984)。1982年に発掘現場で撮影された漆塗り弓の写真では、文様部に緻密な糸巻きとみられる筋状の凹凸が弓の長軸方向に直交して平滑に巻かれている状態が確認できる(写真2・4)。ポリエステル樹脂により包埋した状態で保存された現況の漆塗り弓の肉眼観察では、文様が描かれている塗膜部分に細かな筋状の線が入ることを確認することはできるが、発見当時に撮影されたような明瞭な糸巻きの凹凸は観察されない。そこで、糸巻きについて追認するため

の機器分析調査を実施した。まず、高精細画像で弓の表面を確認した結果、弓の長軸方向に直交して塗膜が筋状に割れた状態は観察されたものの、表面に繊維の痕跡は見られなかった。一方、CT調査で確認した結果、塗膜内部の断層画像において、文様部分にほぼ一致する位置で線状の細かな筋が帯状に並んだ部分が5箇所で確認された(図12)(大江, 2025)。また、細かな筋状の痕跡は文様帯以外の範囲には確認されなかった。これらの点から、CT画像で確認された細かな筋状の痕跡は、出土したときに確認された文様帯の糸巻きの痕跡が塗膜内部に残されたものと考えられる(図13)(大江, 2025)。したがって、糸の巻きつけは、弓の製作時に朱色の漆を塗布する前に文様帯の構図を定めて巻き付けた可能性がある(荒山ほか, 2025)。

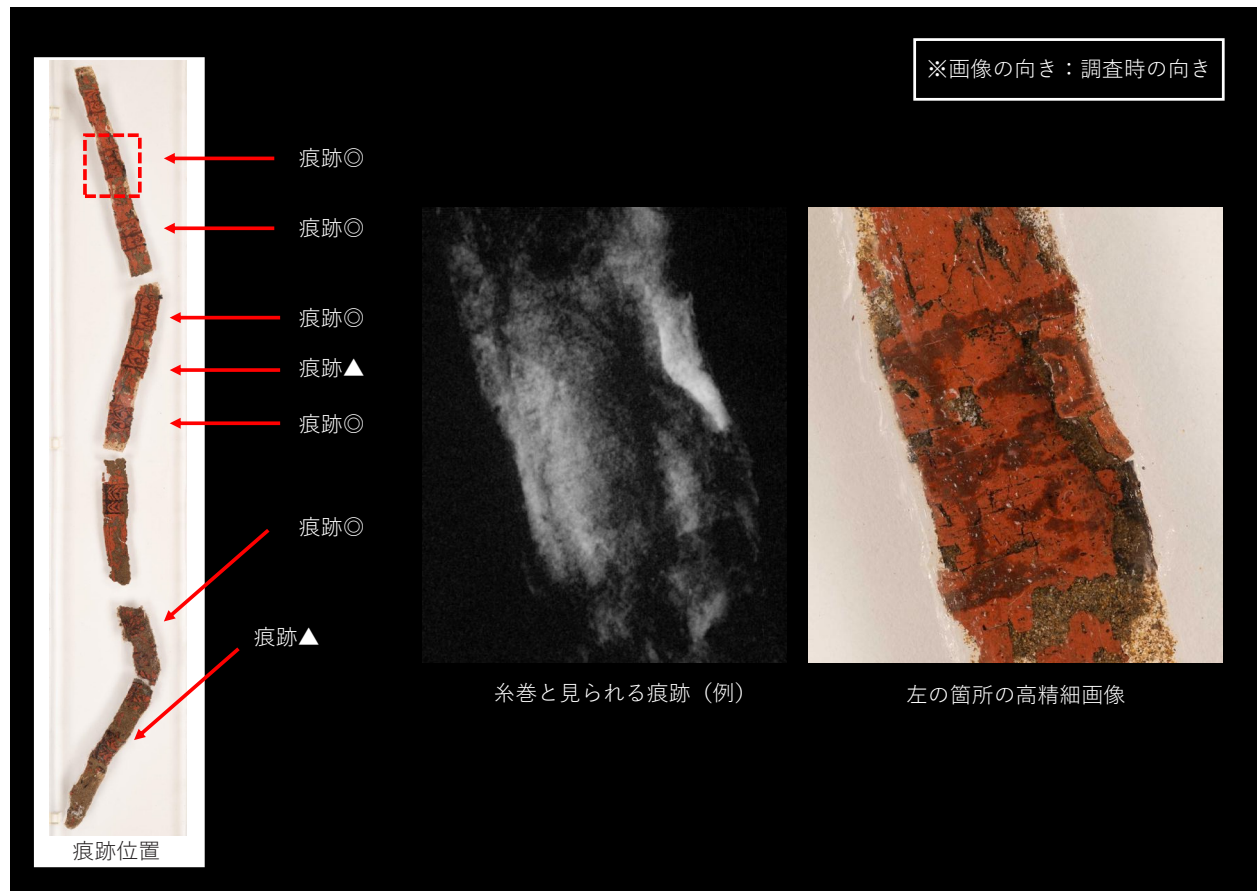


図12. 文様帯の漆層下層の糸巻き (大江, 2025. 一部改変)。

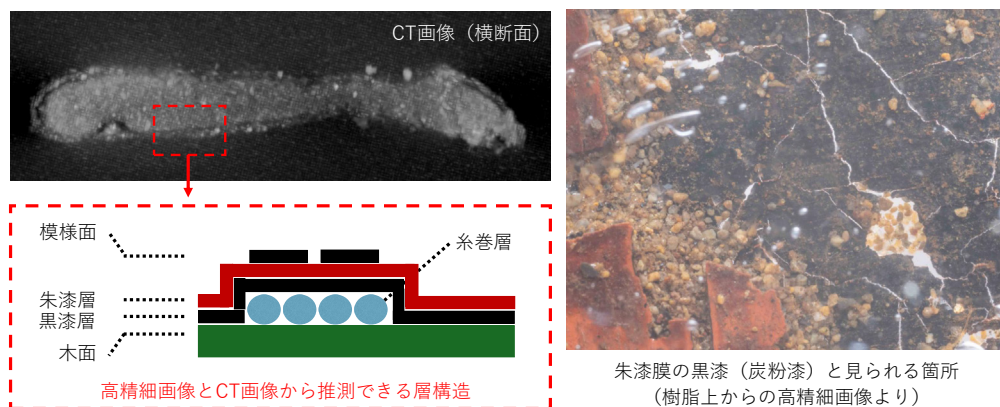


図 13. 高精細画像と CT 調査から推測できる層構造
(大江, 2025. 一部改変).

(大江, 2025. 一部改变).

6-4 製作工程の推測

国立歴史民俗博物館に、紅葉山 33 号遺跡の漆塗り弓の復元品が展示されている (写真 18)。1999 年に開催された「新 弥生紀行」(国立歴史民俗博物館編, 1999) の展示において復元されたものである。図録には、復元にあたり実施した漆片の光学顕微鏡による所見が記されており、「地に炭粉漆、さらに赤 (ベンガラ) 漆を 2 層塗り仕上げられていた」(右代, 1999 : 82) とある。2024 年に実施した高精細画像による撮影でも、黒色層の上に朱色の塗膜層が観察されている (図 13)(大江, 2025)。

出土当時の写真・図・所見(石狩町教育委員会, 1984), 漆片の光学顕微鏡による所見(右代, 1999: 82), 本調査で実施した高精細画像・CT画像の情報を総合した検討により製作工程を推測すると, 次のとおりである(荒山ほか, 2025).

- ①白木弓を作る
- ②弓本体の長軸方向に樋（細い１本の溝）を入れる
- ③弓の局部に構図を定めて帯状になるよう平滑に糸を巻きつける
- ④黒漆（炭粉漆）を弓全体に施す（下地）
- ⑤朱色の漆（ベンガラ漆）を外面に塗る（２層）
- ⑥帯状の糸巻き部分に黒色・茶色の線描により文様を施す

②弓本体の長軸方向に樋（細い1本の溝）を入れる

③弓の局部に構図を定めて帯状になるよう平滑に糸を巻きつける

④黒漆（炭粉漆）を弓全体に施す（下地）

⑤朱色の漆（ベンガラ漆）を外面に塗る（2層）

⑥帯状の糸巻き部分に黒色・茶色の線描により
文様を施す

(文様の線描手順の推測については「6-1」に記載)

弓の製作工程については、機器分析調査の結果では当時とほぼ同様の結果が得られ、さらに表面観察では困難な塗膜内部に残された痕跡の画像データも得られたことから、より明確に手順を推測することが可能になった。



写真 18. 紅葉山 33 号遺跡出土漆塗飾弓 復元。
(所蔵・画像：国立歴史民俗博物館)。

7 今後の課題

今回の資料調査ならびに機器分析調査から得られた基礎データを踏まえ、今後の課題について述べる。

一つは、紅葉山33号遺跡から出土した漆塗り弓の全体形状および構造についてである。当該資料は緩やかなM字形の状態出土し、弓の中央部が逆反りになる形状に見受けられる。ただし、複数の折損部がみられることから、そのままの形状ではなく歪みが生じていることも考えられる。国立歴史民俗博物館が所蔵する復元品(写真18)では、実物で欠損している両端部の弭を含めた全体形状の復元がおこなわれている。また、石狩市教育委員会による復元弓(2005)も別に製作されたものがあり、全体形状を復元している。今回の高精細画像やCT調査による確認では、弓の折損箇所の一部に欠損がみられ、歪みが生じていると推測される箇所が確認された。これまでの検討を総合し、復元的な視点から改めて弓本来の全体形状を確認する必要がある。

もう一つは、弓の系統性における当該資料の位置付けである。弓の形状や大きさは、日本列島における弓の系統性を考えるうえで重要な特徴の一つとなる。縄文・弥生文化における弓の出土例のうち、弓の中央部が逆反りになる例としては、佐賀県菜畑遺跡の弓(弥生Ⅰ期)があり(唐津市教育委員会, 1982)、弦をはずした状態でも弓字形を呈する希少な例として知られている(奈良文化財研究所, 1993)。紅葉山33号遺跡の漆塗り弓の出土状況にみられる概観的な形状は、菜畑遺跡の弓に類似している。ただし、樋とみられる溝の痕跡の位置には両者に違いがあるとみられ、詳細な検討が必要である。紅葉山33号遺跡の漆塗り弓は、形状に加え、トゲ状突起の付いた渦巻文を描いた類例を見ない装飾性をもつ点でも系統的な位置付けが未だ難しい。三浦正人は、縄文期に活気のあった漆文化が縄文期に衰退するとした

うえで、当該期の漆製品について、「いずれも自家製品ではなく、交易で得たものと思われる。すでに道南部での漆工品の出土はなく、櫛や漆工繊維製品も見られなくなる。交易や東北地方の漆文化の変化と密接に関係するのであろう。」(三浦, 2003:90)と述べている^(注8)。紅葉山33号遺跡の漆塗り弓が在地で製作された可能性、本州から持ち込まれた可能性、大陸からの移入品の可能性も含めて課題となる。紅葉山33号遺跡のほかの出土品も考慮しながら、他地域との関わりを視野にさらに検討が必要である。

8 おわりに

本稿では、令和5～7年度に実施した紅葉山33号遺跡出土の漆塗り弓の調査内容について記した。漆塗り弓にみられるトゲ状突起の付いた渦巻文を基調とする装飾は、北海道・東北地域の縄文文化を考える上で重要な資料の一つとなると考えられる。高瀬克範は、当該資料の学術的価値について、縄文晩期から縄文文化の儀礼弓として保存状態が最良であること、北海道における先史漆文化の終着点を示す資料のひとつであること、当時の広域交流の証左となる潜在的可能性、社会のリーダーの性質を示す資料であることを指摘している(高瀬, 2025)。縄文前半期の他の遺跡との関係性ととともに今後も検討していきたい。

謝辞：資料調査、画像掲載、情報収集、当該資料を展示した令和7年度特別展の開催にあたり、下記の個人および機関に大変お世話になりました。本稿の調査成果に、国立アイヌ民族博物館令和6年度ブンカラ共同研究プロジェクト(設備等利用型(C))「石狩市紅葉山33号遺跡出土「漆塗り弓(文様入り)」の調査研究」の成果の一部を含みます。また、CT画像の作成・処理にあたり、国立アイヌ民族博物館令和6年度調査研究プロジェクト(A班基幹研究)「アイヌ民族資料の科学的保存に関する臨床的研究」の成果の一部を含みます。

本末筆ながら心よりお礼申し上げます。

（以下、五十音順）

青野友哉，青柳文吉，右代啓視，木戸奈央子，工藤雄一郎，越田賢一郎，佐藤雅彦，高瀬克範，高橋恵美，田口尚，手塚薫，（故）久田正弘，枡谷隆男。

恵庭市郷土資料館，江別市郷土資料館，金沢市埋蔵文化財センター，北見市ところ遺跡の森，国立アイヌ民族博物館，国立民族学博物館，国立歴史民俗博物館，伊達市教育委員会，千歳市教育委員会，苫小牧市美術博物館，富山県埋蔵文化財センター，八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館，東村山ふるさと歴史館，北海道博物館，北海道立埋蔵文化財センター，吉川弘文館。

（注 1）当該資料を試料とした ^{14}C 年代測定結果について，「得られた ^{14}C 年代は $2015 \pm 25 \text{ }^{14}\text{C BP}$ ，較正年代で $2035\text{--}1895\text{cal BP}$ 」（工藤・永嶋 2021:42）とある。

（注 2）本集成の他にもこれまでに出土した漆製品の中に，腐朽により形状が不明で漆塗り弓と特定の難しい事例もあることが予想される。なお，小林（1998）は，一覧に掲載したほかの資料として，「この他に，縄文晩期の例として，苫小牧市柏原 5 遺跡から飾り弓の可能性があるとされる資料 1 点の報告がある。」（小林 1998：51）としている。また，北斗市押上 1 遺跡の事例による飾り弓の材質と技法について検討されている（小林・森，2006）。

（注 3）縄文・弥生文化の弓を集成した調査研究として，楠（1986），奈良文化財研究所（1999），片岡（2020）等を参照した。

（注 4）本資料については今回の調査では未実見である。

（注 5）伊達市有珠モシリ遺跡出土の骨角製銚頭の文様との類似性については，荒山・石橋，2023：19（注 5）にも触れている。

（注 6）北見市常呂川河口遺跡出土品の資料調査（北見市ところ遺跡の森，2023 ほか）は，いしかり砂丘の風資料館の荒山と坂本恵衣により実施した。

（注 7）分析では次の装置等を使用した。

〔使用装置等〕 次の装置等を使用した。CT：Y.CT Modular（コメットテクノロジーズ・ジャパン社製），解析ソフト：VGstudio MAX 3.3（VOLUME GRAPHICS 社製）

〔測定条件〕 CT は次の条件で測定した。管球：ミニフォーカス，電圧：320kV，電流：2.0mA，Extension：vertical，Integration：600m/s，Projections：1080，拡大率：2.03 倍，空間分解能：

0.20mm，FDD：1400mm，フィルター：Al 0.5mm

〔高精細画像〕次のカメラを使用した。FUJIFILM 社製 GFX100。

（注 8）三浦は，『考古資料大観』『続縄文期の木製品』の中で，「狩猟具の弓としてではなく，墓の副葬品としての弓がアヨロ遺跡，ニナルカ遺跡，タブコブ遺跡，紅葉山 33 号遺跡から出土している。いずれも赤色漆塗で装飾されており，とくに紅葉山例は赤黒色漆で文様が構成されている。北海道の縄文漆工の衰退にかかわる重要な出土品である。」とも述べている（三浦 2004：234）。

引用文献

青野友哉，2025. 動物意匠の形態変化からみた棒状鹿角製品の変遷．動物考古学，42:1-17.

荒山千恵，2023. 口絵 2. 紅葉山 33 号遺跡の「漆塗り弓」に描かれた渦巻文様．いしかり砂丘の風資料館紀要，13: Ⅲ頁．

荒山千恵・石橋孝夫，2023. 石狩市紅葉山 33 号遺跡から出土した「漆塗り弓」について．いしかり砂丘の風資料館紀要，13:13-20.

荒山千恵・大江克己・藪中剛司・石橋孝夫，2025.(P08) 石狩市紅葉山 33 号遺跡出土の漆塗り弓（文様入り）を対象とした分析装置を用いた調査研究．日本考古学協会第 91 回総会研究発表要旨．日本考古学協会．95p.

千歳市教育委員会，1994. 千歳市文化財調査報告書 19：丸子山遺跡における考古学的調査．千歳市教育委員会．

ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)

伊達市噴火湾文化研究所，2026. USUMOSHIRI. I 遺構・遺物編．

伊達市教育委員会，2003. 図録 有珠モシリ遺跡．

恵庭市教育委員 1981. 柏木 B 遺跡．恵庭市教育委員会．八戸市教育委員会編，2011. 縄文の美：是川中居遺跡出土品図録～平成の出土品～．八戸市教育委員会．

北海道教育委員会，1979. 美沢川流域の遺跡Ⅲ．

北海道埋蔵文化財センター，1981. 美沢川流域の遺跡Ⅳ．

北海道埋蔵文化財センター，1998. 千歳市キウス 4 遺跡 (2)，北埋調報 124.

- 北海道埋蔵文化財センター, 1999. 千歳市キウス4遺跡(3), 北埋調報134.
- 北海道埋蔵文化財センター, 2003. 千歳市キウス4遺跡(10), 北埋調報187.
- 北海道常呂町教育委員会, 1996. 常呂川河口遺跡, 1.
- 石橋孝夫, 1984. 石狩・紅葉山遺跡から出土した古代文様の描かれた弓. 北海道新聞夕刊(1984年9月12日).
- 石橋孝夫, 1999. 石狩の遺跡. 古代に遊ぶ. さっぽろ文庫90, 札幌市・札幌市教育委員会, 162-173.
- 石橋孝夫, 2005. 紅葉山33号遺跡の飾り弓. 石狩ファイル. 石狩市教育委員会 No.51.
- 石橋孝夫, 2013. <特集> 続縄文文化とは③ 道央部の続縄文文化の特徴. Arctic Circle. 北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌. 冬季号. 85, 4-9.
- 石狩町教育委員会, 1979. 石狩湾新港地域開発区域埋蔵文化財調査報告書.
- 石狩町教育委員会, 1984. 紅葉山33号遺跡発掘調査報告書.
- 石狩町教育委員会, 1985. 紅葉山33号遺跡発掘調査報告書(1984年版)の追加資料と訂正について.
- 石川ゆずは, 2005. 上久津呂中屋遺跡出土の弧状漆塗木製品. 紀要 富山考古学研究, 8.
- 金沢市, 2010. 石川県金沢市中屋サワ遺跡. 金沢市文化財紀要262, 金沢市埋蔵文化財センター.
- 金沢市, 2009. 石川県金沢市中屋サワ遺跡4: 縄文時代編・下福増遺跡2・横江荘遺跡2. 金沢市文化財紀要255, 金沢市埋蔵文化財センター.
- 唐津市教育委員会, 1982. 菜畑遺跡. 唐津市文化財調査報告書5.
- 片岡生悟, 2020. 縄文・弥生時代の弓矢について—完形出土品を中心とした分析と考察—. 東京大学考古学研究室研究紀要, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究, 33:67-86.
- 北見市ところ遺跡の森, 2023. 国指定重要文化財「北海道常呂川河口遺跡墓坑出土品」図録.
- 小林幸雄, 1994. 付篇 丸子山遺跡1号環状土籬出土の飾り弓の材質と技法. 千歳市教育委員会, 1994. 千歳市文化財調査報告書19: 丸子山遺跡における考古学的調査. 千歳市教育委員会, 249-250.
- 小林幸雄, 1998. 飾り弓の材質と技法. 北海道開拓記念館研究紀要, 26:39-58.
- 小林幸雄・舟山直治・手塚薫・水島未記, 2003. 北海道開拓記念館移動博物館「北海道のうるし文化」図録. 北海道開拓記念館.
- 小林幸雄・森靖裕, 2006. 飾り弓の材質と技法—北海道北斗市押上1遺跡の事例から—, 日本文化財科学会第23回大会研究発表要旨集. 199-189.
- 児玉マリ, 1981. アイヌ文様. 北海道大百科事典 上巻. 北海道新聞社. 29-30.
- 国立民族学博物館編, 1993. アイヌモシリ 民族文様からみたアイヌの世界(図録).
- 国立歴史民俗博物館編, 1999. 新 弥生紀行—北の森から南の海へ. 朝日新聞社(図録).
- 工藤雄一郎・永嶋正春, 2021. 縄文時代・続縄文時代の遺跡出土漆製品の¹⁴C年代測定. 国立歴史民俗博物館研究報告, 225:39-57頁.
- 楠正勝, 1986. 弓について. 金沢市文化財紀要: 金沢市新保本町チカモリ遺跡. 金沢市教育委員会. 288-309.
- 三浦正人, 2003. 縄文・続縄文の木の文化. 新北海道の古代. 続縄文・オホーツク文化. 2:70-97.
- 三浦正人, 2004. 木・繊維製品. 大沼忠春編, 考古資料大観. 11. 続縄文・オホーツク・擦文文化. 小学館. 232-242.
- 中村五郎, 1988. 弥生文化の曙光—縄文・弥生両文化の接点. 未来社.
- 奈良文化財研究所, 1999. 木器集成図録. 奈良文化財研究所史料36.
- 大江克己, 2025. 埋蔵文化財と保存科学 X 線 CT による紅葉山33号遺跡出土の漆塗り弓の調査. 石狩市教育委員会主催 新市指定文化財記念講演会(Ⅱ), 発表資料.
- 佐々木順子, 1983. アイヌ文様の系譜—研究史的視点および今後の課題. 紀要. 北海道立近代美術館. 第5・6号: 105-122.
- 設楽博己, 2003. 続縄文文化と弥生文化の相互交流. 国立歴史民俗博物館研究報告. 108:27-44.
- 高橋正勝, 1980. アヨロ遺跡—続縄文(恵山式土器)文化の墓と住居址—. 北海道先史学会協会.
- 高瀬克範, 2025. 北海道の縄文・続縄文社会と紅葉山33号遺跡出土漆塗り弓. 新市指定文化財記念講演会Ⅰ発表資料.

- 手塚薫，2022. 渦巻文様．関根達人・菊池勇夫・手塚薫編・北原モコットウナシ編，アイヌ文化史辞典．吉川弘文館．343-344.
- 常呂町教育委員会，1996，常呂川河口遺跡（1）.
- 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター，1984. タプコブ．
- 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター，1985. ニナルカ．
- 東京国立博物館 画像検索 (<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/index>).
- 鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター，2002. 『鳥取県教育文化財団調査報告書 74：青谷上寺地遺跡』（本文編 2）財団法人鳥取県教育文化財団．
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所編，2013. 上久津呂中屋遺跡発掘調査報告．富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 55 集（第一分冊縄文時代編）.
- 右代啓視，1999. コラム 6，漆塗り弓を復元する．国立歴史民俗博物館編，新 弥生紀行－北の森から南の海へ．朝日新聞社．82p.

